

2020 年 1 月 21 日

男子体操競技情報 28 号

(公財)日本体操協会
東京オリンピック強化本部
審判委員会体操競技男子審判本部

【目次】

1	はじめに	1
2	第 49 回世界体操競技選手権シュトゥットガルト大会報	2
3	2019 年度国内競技大会総括および指標	16
4	2017 年版採点規則修正、追加情報	18
5	おわりに	25
※	難度認定及び演技実施の確認事項と FIG 通達	別刷 1
	タイ・ブレイク	別刷 29
	2020 年度国内内規	別刷 30

1. はじめに

東京オリンピック男子体操競技強化本部
男子体操競技強化本部長 水鳥 寿思

2020 年の東京五輪まで残すところ 6 か月あまりとなりました。選手・コーチ・審判の皆様方におかれましては大会の成功へ向けてますますご尽力いただいていることと存じます。2019 年の世界選手権大会ではこれまで日本を牽引してきた内村航平選手、白井健三選手が不在のなか、若手選手が奮闘し団体総合銅メダルを獲得することができました。直近の 1 年間で D スコアを大幅に向上させるとともに、決勝の舞台で堂々と自身の演技を披露することができたことは日本チームにとって大きな収穫であったと感じています。一方で、ライバルであるロシア、中国は中核となる選手が確実に実力を高め、存在感を増してきています。そのような状況のなか、日本が 2020 年の東京五輪で金メダルを獲得することは容易ではありません。若手選手の競技力が急伸長し、トップクラスの選手がこれまで以上に実力を高めることでその目標が達成されるものと存じます。そのためには選手のみならず、コーチや審判をはじめ、すべての体操関係者が切磋琢磨し課題を解決することで道が開けるのだと確信しています。ぜひ、この最大の目標を達成するため、日本チーム一丸となって頑張りましょう。その具体的な取り組みのひとつとして、本情報をしっかりと共有し、理解を深め、最適な戦略をもってトレーニングを積み重ねることが重要であると考えています。適用されるルールが求める動きを的確に把握し、その対応策に基づき日本の美しく力強い演技をさらに高いレベルまで引き上げていきたいと考えています。それにより、東京五輪で素晴らしい演技を世界に披露し、日本国民に勇気と感動を与え、体操競技がさらに発展することを目指したいと存じます。関係者の皆様におかれましては、引き続きご尽力いただきますようよろしくお願い申し上げます。

2. 第 49 回世界体操競技選手権シュトゥットガルト大会報告

体操競技男子審判本部

本部長 高橋 孝徳

本部員 笠松 昭宏

1. 派遣期間：2019年9月28日(日)～10月15日(火)
2. 開催地：ドイツ シュトゥットガルト
3. 会場：Hanns-Martin-Schleyer-Halle, Mercedesstraße 69, 70372 Stuttgart
www.hallenduo.de/en/home/
4. 宿泊先：Messehotel Europe
www.europe-hotels-international.de/en/messehotel-europe/hotel/
5. 審判員：高橋 孝徳（体操競技男子審判本部本部長）
笠松 昭宏（体操競技男子審判本部本部員／FIG 指名）
6. 日程：大会スケジュール

9月	28日	(土)	【高橋出発】成田 13:35⇒ウィーン 18:35 ウィーン 20:15⇒シュトゥットガルト 21:35
	29日	(日)	公式練習 監督会議 女子審判会議
	30日	(月)	女子ポディウムトレーニング (1～6班) 女子審判会議 【笠松出発】羽田 12:35⇒ミュンヘン 17:15 ミュンヘン 19:30⇒シュトゥットガルト 20:15
10月	1日	(火)	女子ポディウムトレーニング (7～12班) 男女審判会議
	2日	(水)	男子ポディウムトレーニング (1～4班) 男子審判会議
	3日	(木)	男子ポディウムトレーニング (5～8班) 男子審判会議、開会式
	4日	(金)	女子予選 (1～6班)
	5日	(土)	女子予選 (7～12班) ※日本女子 9班
	6日	(日)	男子予選 (1～4班)
	7日	(月)	男子予選 (5～8班) ※日本男子 5班
	8日	(火)	女子団体決勝
	9日	(水)	男子団体決勝
	10日	(木)	女子個人総合決勝
	11日	(金)	男子個人総合決勝
	12日	(土)	種目別決勝 男子 FX、PH、SR 女子 VT、UB
	13日	(日)	種目別決勝 男子 VT、PB、HB 女子 BB、FX フェアウェルバンケット

14 日	(月)	【高橋現地発】 シュトゥットガルト 12:40⇒ウィーン 14:00 ウィーン 17:45⇒ 【笠松現地発】 シュトゥットガルト 13:15⇒ミュンヘン 14:00 ミュンヘン 16:40⇒
15 日	(火)	【高橋帰国】成田 11:55 【笠松帰国】羽田 10:50

7. 参加状況：67 カ国 256 名

1) チーム数 25 ヶ国

2) 個人出場 21 カ国

6 種目出場：156 名

ゆ か：205 名

あん馬：205 名

つり輪：201 名

跳 馬：39 名 (2 本実施)

平行棒：192 名

鉄 棒：199 名

8. 審判会議

1) TC メンバー

TC メンバーにより担当種目のプレゼンテーションが行われた。

TC メンバーと担当種目は以下の通りである。その他、10.審判団を参照。

President MICKEVICS Arturs (LAT)			
FX	THOMSON Jeffrey (CAN)	VT	TOMITA Hiroyuki (JPN)
PH	HUANG Liping (CHN)	PB	MARCOS FELIPE Julio (ESP)
SR	TOMBS Andrew (GBR)	HB	ALBRECHT Holger (GER)

2) 最初に President の MICKEVICS Arturs 氏より挨拶があり、NewsLetter#34 について解説がなされた。NewsLetter#35 に記載された競技中の圧縮サポーターの使用の禁止等にも言及があった。その後種目ごとに担当者からプレゼンテーションが行われた。各種目とも従来からの変更点、および数か所の減点項目の確認や注意点が説明され、E スコアの採点練習が実施された。

以下は各種目で取り上げられた減点項目である。

□ ゆ か

1) 宙返り技のひねりについて

- ・ひねり不足の減点は実施された角度不足を明確に
- ・連続技の一つ目の着地姿勢についても減点の対象となる

2) 着地の準備について

- ・準備局面の見られる着地かどうか、余裕のない捌きは実施状況により 0.1 or 0.3 の減点
- ・コントロールされていない着地は 0.1 or 0.3 or 0.5 の減点
- ・止めることなく、次の動作に移行する捌きは減点の対象

3) シンプルステップ

- ・180度の転向のない単純な方向転換についても 0.1 の減点

4) 空中での姿勢

- ・かかえ込みと伸身姿勢の違いを明確に

5) 着地での足開き

- ・着地での足開きは0.1or 0.3の減点

□ あん馬

- 1) 交差倒立系の技
 - ・スイングを使うことなく力で垂直に脚が上がる捌きは不認定
 - ・力を使う捌き、腰まがりすべてで0.5までの減点
- 2) 縦向き移動での角度減点
 - ・角度の減点は旋回一周毎に減点。
 - ・移動開始から技の成立時まで、手一つ分は0.1、より大きく左右の手がずれている場合は0.3の減点
- 3) 倒立を経過する終末技
 - ・上げる経過での力の使用、肘まがり、倒立にはまらない場合の減点について

□ つり輪

- 1) 中水平支持の静止ポジションについて
 - ・輪の中での水平姿勢が求められる
 - ・肩の位置が高いものはC難度で認定
 - ・角度、高さ、身体の姿勢それぞれに減点がある
- 2) 開脚水平支持での静止ポジションにおいて
 - ・身体が水平かどうか、身体の姿勢がまっすぐか、アーチ型になっているものは減点
 - 腰まがりの減点

～15°	: -0.1	16° ～30°	: -0.3
30° を超える	: -0.5	45° を超える	: -0.5&不認定
- 3) 振動倒立技について
 - ・肘まがりが90°を超えるものは0.5&不認定、足が45°を超えて下がるものは0.5&不認定
- 4) 静止時間について
 - ・水平支持、中水平支持
 - 脚が止まらないで動いている状態では静止をカウントしない

□ 跳馬

- 1) 第1空中局面
 - ・脚の開き、膝のまがり
 - カサマツ系における手のつく位置
- 2) 第2空中局面
 - ・脚の開き、つま先の乱れ、高さ不足
- 3) ひねり不足についても厳密に対処
- 4) 着地準備と着地

□ 平行棒

- 1) NL35 の確認
 - ・ヒーリー、マクーツタイプについて、90° を超える肘まがりは不認定
 - ・前方2回宙返り下りにおいて、1回転目、あるいは2回転目にひねっても価値は同じ
- 2) スイングからの倒立（棒下宙返り倒立など）

以下の減点項目を解説

 - ①腕のまがり
 - ・棒下宙返り倒立を例に説明
 - ②姿勢
 - ③倒立位からの角度逸脱
 - ・棒下宙返り倒立を例に説明
 - ④手のずらし、握り替え、ステップ

⑤コントロールされているかどうか

⑥ダブルスイング ex)ヒールからスイング倒立、止まらず振り下ろしは 0.3 の減点

3) バブサーでのバーを持つ際の体勢

・身体の位置が水平位からの外れや着手時に肩角度がある実施は減点、46° 以上は不認定

4) 宙返り 1/2 ひねり腕支持系の技の捌き

・平行棒と同じところで身体を伸ばして受ける

5) 前振り上がり：腰の位置が低い捌きは相応の減点 (NL34)

・前振り上がり脚前拳支持は 0.1or 0.3 の減点

6) 静止技の静止時間

・脚前拳支持や力倒立などの静止技は 2 秒静止しなければ 0.3 の減点

7) 終末技

・高さ、着地準備、着地

□ 鉄 棒

1) ヤマワキの減点について

・高さ、腰まがり減点について

2) クーストの減点について

・明確なとび姿勢、ひねり不足、角度の逸脱

3) 膝のまがりについて

・手放し技の前後やその後の車輪での膝まがりとは毎回 0.1or0.3 の減点

4) 順手背面について

・支持局面で腰の位置が肩になれば減点

・ケステで足を抜いただけのものは減点なし

5) 倒立姿勢の角度について

9. 新技申請

あん馬・DSA 直接背面とび横移動倒立 450° ひねり 3/3 移動下り (IV:F 難度)

・馬端外向き支持から遠い方の把手へ下向き逆移動、一把握上縦向き外向き支持 (III:C 難度)

平行棒・け上がり開脚抜き懸垂 (III:C 難度 OKUBO)

・屈身タジェダ (III:F 難度 JUAREZ1)

・前方屈身宙返り懸垂 (I:C 難度 JUAREZ2)

・前方屈身 2 回宙返りひねり下り (IV:G 難度 DARAROYAN)

鉄 棒・マルケロフひねり片大逆手後ろ振り上がり倒立 (II:D 難度)

・屈身宙返りひねり前方宙返り (V:B 難度)

10. 審判団

66 カ国 95 名 (1 カ国複数名派遣国：29 カ国)

D 審判：12 カ国 12 名 R 審判：12 カ国 12 名 E 審判：61 カ国 71 名

ALG (D・E)	ARG (R・E)	AUS (R・E)	AZE (D・E)	BEL (E・E)
BLR (R・E)	BRA (E・E)	CAN (E・E)	CHN (E・E)	CYP (R・E)
ESP (D・E)	FIN (E・E)	FRA (E・E)	GBR (D・E)	GEO (D・E)
GER (R・E)	HUN (E・E)	ISR (D・E)	ITA (D・E)	JPN (R・E)
KAZ (E・E)	KOR (D・E)	NED (D・E)	ROU (E・E)	SUI (R・E)
TPE (E・E)	TUR (R・E)	UKR (R・E)	USA (D・E)	

R 審判のみ派遣：BUL、IRL、SLO

◆ D 審判団

FX	D1 : HAN Yoon Soo (KOR)	D2 : VUKOJA Mario (CRO)
PH	D1 : IANEZ RAMOS Miguel Angel (ESP)	D2 : MAY James (GBR)
SR	D1 : GIORGADZE Ilia (GEO)	D2 : LAZZARICH Diego (ITA)
VT	D1 : ALIYEV Rza (AZE)	D2 : GAZIT Ilan (ISR)
PB	D1 : HADJI Mohammed Smail (ALG)	D2 : ZUNICH Butch Andreja (USA)
HB	D1 : RUPCIK Lubos (SVK)	D2 : REIMERING Vincent (NED)

◆ R 審判団

Name	NF	Cat.	予選	団体	個人	種目別
DONOGHUE, Denis	IRL	2	HB	PH	PH	VT
FEDARAU, Andrey	BLR	2	VT	SR	PB	SR
KASAMATSU, Akihiro	JPN	2	PB	HB	FX	SR
MANNIX, Bradley	AUS	2	PB	HB	PB	PH
HODZIC LEDERER, Enes	SLO	2	HB	SR	PH	VT
INCE, Mehmet	TUR	2	SR	PB	VT	HB
KUONI, Andreas	SUI	2	PH	PH	FX	FX
KURTEV, Zdravko	BUL	2	FX	PB	HB	PB
KOROLENKO, Oleksiy	UKR	2	PH	VT	SR	HB
SAGRERAS, Alejandro	ARG	2	SR	VT	HB	PB
ANGONAS Dimitros	CYP	2	FX	FX	VT	PH
NEUMANN, Olaf	GER	2	VT	FX	SR	FX

◆ 審判配置

- 予選 平行棒 R1 笠松昭宏
- 団体決勝 鉄 棒 R1 笠松昭宏
- 個人総合決勝 つり輪 E4 高橋孝徳
- ゆ か R2 笠松昭宏
- 種目別決勝 つり輪 R2 笠松昭宏

11. 結 果 ;

□ 日本選手予選結果

個人総合	萱 和磨	85.731	4 位	予選通過
	谷川 翔	80.531	40 位	
ゆ か	橋本大輝	14.433	11 位	
	萱 和磨	14.333	43 位	
	神本雄也	13.866	47 位	
	谷川 翔	12.566	151 位	
あん馬	橋本大輝	14.883	5 位	予選通過
	萱 和磨	14.633	8 位	予選通過
	谷川 翔	14.400	11 位	
	谷川 航	13.333	38 位	
つり輪	神本雄也	14.283	17 位	
	萱 和磨	14.033	24 位	
	谷川 航	13.966	28 位	
	谷川 翔	13.633	50 位	

跳 馬 種目別 エントリー無し	橋本大輝	14.766	
	萱 和磨	14.266	
	神本雄也	13.966	
	谷川 翔	12.466	
平行棒	萱 和磨	14.800	8 位
	神本雄也	14.700	12 位
	谷川 航	14.633	15 位
	谷川 翔	13.900	50 位
鉄 棒	橋本大輝	14.366	8 位 予選通過
	萱 和磨	14.066	18 位
	神本雄也	14.033	20 位
	谷川 翔	12.833	98 位

□ 団体総合予選

	国名	ゆ か	あん馬	つり輪	跳 馬	平行棒	鉄 棒	合 計
1	RUS	43.399	42.399	43.133	44.399	43.799	42.799	259.928
2	CHN	43.932	41.258	42.400	43.566	44.399	42.799	258.354
3	日本	42.232	43.916	42.282	42.998	44.133	42.465	258.026
4	UKR	41.899	41.833	42.132	44.066	43.866	39.732	253.528
5	GBR	43.082	40.766	41.465	43.365	42.766	40.965	252.409
6	SUI	42.074	39.632	40.532	43.299	43.665	42.198	251.400
7	USA	41.265	39.065	41.533	43.165	43.266	42.065	250.359
8	TPE	41.832	41.749	41.099	42.849	41.265	41.299	250.093

□ 団体総合決勝

	国名	ゆ か	あん馬	つり輪	跳 馬	平行棒	鉄 棒	合 計
1	RUS	43.833	41.832	43.732	44.432	44.399	43.498	261.726
2	CHN	43.333	43.783	43.366	43.999	45.141	41.107	260.729
3	日本	41.965	43.399	43.432	43.874	43.332	42.157	258.159
4	USA	43.332	40.799	41.966	42.700	43.566	42.215	254.578
5	GBR	41.866	41.233	41.999	43.899	42.966	39.648	251.611
6	TPE	41.432	42.900	41.365	41.165	40.266	41.115	248.243
7	SUI	42.666	39.841	40.699	41.666	42.233	39.933	247.038
8	UKR	41.265	39.633	41.265	42.299	42.232	39.899	246.593

□ 個人総合予選

Rk.	Gymnast	NF	FX	PH	SR	VT	PB	HB	Total
1	NAGORNY N	RUS	14.900	14.033	14.400	14.900	14.800	14.300	87.333
2	DALALOYAN A	RUS	14.733	13.366	14.133	15.133	14.733	14.433	86.531
3	XIAO Ruoteng	CHN	14.833	13.400	13.833	14.766	14.966	14.033	85.831
4	萱 和磨	日本	13.933	14.633	14.033	14.266	14.800	14.066	85.731
5	SUN Wei	CHN	14.166	12.900	14.000	14.700	14.800	14.333	84.899
6	PAKHNIUK P	UKR	14.133	13.700	13.466	14.500	15.033	13.766	84.598
7	LEE Chih Kai	TPE	14.333	14.966	13.500	14.483	13.966	13.233	84.481
8	VERNIAIEV O	UKR	13.000	14.600	13.933	14.733	14.800	13.233	84.299

□ 個人総合決勝

Rk.	Gymnast	NF	FX	PH	SR	VT	PB	HB	Total
1	NAGORNY N	RUS	15.041	14.566	14.633	15.066	15.300	14.166	88.772
2	DALALOYAN A	RUS	15.200	14.000	14.433	14.066	15.233	14.233	87.165
3	VERNIAIEV O	UKR	14.166	14.866	14.000	14.800	15.475	13.666	86.973
4	XIAO Ruoteng	CHN	15.025	15.000	13.933	14.800	15.266	12.666	86.690
5	SUN Wei	CHN	14.033	14.991	13.966	14.600	14.933	14.000	86.523
6	萱 和磨	日本	14.300	14.566	14.300	14.000	15.000	13.733	85.899
7	MIKULAK S	USA	14.400	13.000	14.000	14.266	15.325	14.700	85.691
8	FRASER Joe	GBR	14.166	13.800	13.966	14.266	14.900	14.000	85.098

□ 種目別決勝

◇ゆか

Rk.	Gymnast	NF	D-Score	E-Score	Pen.	Total	予選 D
1	YULO Carlos Edriel	PHI	6.5	8.800		15.300	6.5
2	DOLGOPYAT Artem	ISR	6.4	8.800		15.200	6.4
3	XIAO Ruoteng	CHN	6.2	8.733		14.933	6.2
4	DALALOYAN Artur	RUS	6.2	8.600		14.800	6.5
5	LIN Chaopan	CHN	6.2	8.500		14.700	6.2
6	NAGORNY Nikita	RUS	6.2	8.266	-0.3	14.166	6.4
7	KIM Hansol	KOR	6.3	7.533		13.833	6.1
8	CUNNINGHAM Dominick	GBR	6.1	7.566	-0.1	13.566	6.1

◇あん馬

Rk.	Gymnast	NF	D-Score	E-Score	Pen.	Total	予選 D
1	WHITLOCK Max	GBR	7.0	8.500		15.500	6.9
2	LEE Chih Kai	TPE	6.5	8.933		15.433	6.2
3	MCCLLENAGHAN Rhys	IRL	6.4	9.000		15.400	6.3
4	ZOU Jingyuan	CHN	6.3	8.700		15.000	6.0
5	萱 和磨	日本	6.6	8.266		14.866	6.4
6	TOMMASONE Cyril	FRA	6.3	8.533		14.833	6.3
7	SHIAO Yu-Jan	TPE	6.0	8.733		14.733	6.0
8	BELYAVSKIY David	RUS	6.4	7.166		13.566	6.4
9	橋本 大輝	日本	5.9	7.433		13.333	6.0

◇つり輪

Rk.	Gymnast	NF	D-Score	E-Score	Pen.	Total	予選 D
1	COLAK Ibrahim	TUR	6.2	8.733		14.933	6.2
2	LODADIO Marco	ITA	6.3	8.600		14.900	6.3
3	AIT SAID Samir	FRA	6.2	8.600		14.800	6.2
4	PETROUNIAS Eleftherios	GRE	6.3	8.433		14.733	6.3
5	ZANETTI Arthur	BRA	6.2	8.525		14.725	6.1
6	ABLIAZIN Denis	RUS	6.3	8.366		14.666	6.1
7	TOVMASYAN Artur	ARM	6.1	8.100		14.200	6.1
8	KLESSING Nick	GER	6.1	8.066		14.166	6.0

◇跳馬

Rk.	Gymnast/NF	D-Score	E-Score	Pen.	Score	Total	予選 D
1	NAGORNYI Nikita	5.6	9.333		14.933	14.966	5.6
	RUS	5.6	9.400		15.000		5.6
2	DALALOYAN Artur	5.6	9.333		14.933	14.933	5.6
	RUS	5.6	9.333		14.933		5.6
3	RADIVILOV Igor	5.6	9.233		14.833	14.749	5.6
	UKR	5.6	9.066		14.666		5.6
4	DRAGULESCU Marian	5.6	9.366		14.966	14.624	5.6
	ROU	5.4	8.883		14.283		5.8
5	CUNNINGHAM Dominick	5.2	9.366		14.566	14.566	5.6
	GBR	5.4	9.166		14.566		5.4
6	LE Thanh Tung	5.6	9.066		14.666	14.533	5.6
	VIE	5.2	9.200		14.400		5.2
7	SHEK Wai Hung	6.0	7.933		13.933	14.466	6.0
	HKG	6.0	9.000		15.000		6.0
8	YANG Hakseon	6.0	8.033	-0.3	13.733	14.316	6.0
	KOR	5.6	9.300		14.900		5.6

◇平行棒

Rk.	Gymnast	NF	D-Score	E-Score	Pen.	Total	予選 D
1	FRASER Joe	GBR	6.6	8.400		15.000	6.6
2	ONDER Ahmet	TUR	6.2	8.783		14.983	6.2
3	萱 和磨	日本	6.3	8.666		14.966	6.3
4	XIAO Ruoteng	CHN	6.4	8.566		14.966	6.2
5	ARICAN Ferhat	TUR	6.5	8.400		14.900	6.5
6	SUN Wei	CHN	6.2	8.266		14.466	6.2
7	PAKHNIUK Petro	UKR	6.5	7.700		14.200	6.5
8	DAUSER Lukas	GER	6.3	7.533		13.833	6.3

◇鉄棒

Rk.	Gymnast	NF	D-Score	E-Score	Pen.	Total	予選 D
1	MARIANO Arthur	BRA	6.3	8.600		14.900	6.3
2	SRBIC Tin	CRO	6.2	8.466		14.666	6.2
3	DALALOYAN Artur	RUS	6.1	8.433		14.533	6.0
4	橋本 大輝	日本	6.2	8.033		14.233	6.1
5	MIKULAK Samuel	USA	6.3	7.766		14.066	6.1
6	LIN Chaopan	CHN	6.2	7.833		14.033	6.5
7	BULL Tyson	AUS	6.0	7.200		13.200	6.0
8	TANG Chia-Hung	TPE	5.8	6.966		12.766	6.2

12. 所 感

今回会場となったシュトゥットガルト市は 1989 年、2007 年にも世界選手権が開催されており、今大会で 3 回目となる。毎年、ワールドカップシリーズやチームカップなども開かれ、体操界では歴史と伝統のある街での開催であった。会場内はシュトゥットガルト市民の熱狂的な声援の下、華やかな雰囲気の中で大変盛り上がった大会となった。

日本チームは東京 2020 の団体出場枠を 2018 年ドーハ大会にて獲得しており、今回は前年の雪辱を晴らすべく、ロシア、中国との勝負に勝つことを目標に当地に乗り込んだ。

予選での日本は第 5 班、2 日目朝の出場となった。ポディウムトレーニングの跳馬において谷川航選手が足首を捻挫するアクシデントがあり、想定した出場種目、演技順を急遽入れ替える事態が生じた状況で競技に挑むこととなった。3 班に登場したロシアは、ポディウムトレーニングでは粗さの目立つ捌きも散見され、強さ、上手さはあるものの、団体決勝に標準を合わせた調整であるかと思われる動きであった。一方、6 班での出番となった中国は、全ての審判が見守る中、ポディウムトレーニングから圧巻の実施であり、ところどころ小さなミスはあるものの、強さを印象付ける内容であった。

日本、中国、ロシアの D スコア合計を比較すると、予選においてはロシアが 108.5 となり、この一年のロシア出場選手の予想 D スコア合計 (108.1) を上回ったスコアであった。日本は谷川航選手のケガの影響、中国はあん馬で 3 名が落下や不安定な実施、平行棒で ZOU Jingyuan 選手の失敗などがあり 107 点台であった。

団体決勝においては、3 か国とも合計 108 点台にのせる D スコアであった。日本はロシアよりも 0.2 上回っているが、ロシアはゆか、あん馬、跳馬で予選よりも D スコアを抑えた演技実施であったこと、さらに最終種目で日本、中国ともに大過失があったため、戦略的に D スコアを抑えた演技を実施したことが要因である。中国は鉄棒のみ予選のよりも D スコアが低く、他 5 種目は同じもしくは予選を超える D スコアであった。仮に鉄棒で落下や大過失による D スコアの減損がなければ 109 点台を超えることになる。

団体 3 か国の D スコアを種目ごとに分析すると今まで日本が稼ぐ種目であったゆかが大きく下回っている。あん馬は中国がやや安定感を欠く印象であった。つり輪は日本が弱い種目とされてきたが、D スコアだけに限ると 2 か国を上回っており、今後は質を高めることを意識する必要があるといえる。跳馬では両国とも 5.6 の跳越技を 3 名揃えており日本としては谷川航選手の損失が大きかった。平行棒では団体決勝において中国が 19.6 という驚異的なスコアを獲得し、大きなアドバンテージをつけている。鉄棒は従来、日本が最後に逆転できる種目との位置づけであったが、その優位性をあまり感じられない状況になっている。

◆団体予選上位 3 カ国の D スコア

	ゆ か	あん馬	つり輪	跳 馬	平行棒	鉄 棒	合 計
ロシア	18.7	18.5	18.1	16.8	18.7	17.7	108.5
中 国	17.9	17.6	17.9	16.8	18.7	18.5	107.4
日 本	17.2	18.7	18.3	16.0	19.0	18.1	107.3
日口比較	-1.5	0.2	0.2	-0.8	0.3	0.4	-1.2
日中比較	-0.7	1.1	0.4	-0.8	0.3	-0.4	-0.1

◆団体決勝上位 3 カ国の D スコア

	ゆ か	あん馬	つり輪	跳 馬	平行棒	鉄 棒	合 計
ロシア	18.7	18.2	18.1	16.4	19.0	17.8	108.2
中 国	18.7	18.3	17.9	16.8	19.6	17.3	108.6
日 本	17.8	18.7	18.3	16.4	19.0	18.2	108.4
日口比較	-0.9	0.5	0.2	0.0	0.0	0.4	0.2
日中比較	-0.9	0.4	0.4	-0.4	-0.6	0.9	-0.2

予選の E スコアでは、3 か国の得点はほぼ同等であった。想定した点数よりも低くなったのはそれぞれに複数のミスが起こった結果である。一方、団体決勝で日本はロシアに 3.467、中国に 2.670 の差をつけられた。この要因として転倒や着地の乱れなどの大欠点に注目しがちであるが、中欠点のみならず小欠点の積もり重なった減点の総量が 2 か国と日本の差となったと感じられた。競技が進むに連れて上位 2 か国の得点が少しづつ日本を上回っていくといった印象であった。着地で少し動く、わずかなひねり不足、倒立の不安定さ、角度の逸脱、このような 0.1 の積み重ねがこの順位の大きな要因だと感じられた。

優勝したロシアは、ソ連が崩壊しロシア連邦となってからの初の団体優勝であった。現地に入ってから動きからすると、中国の方が上回る勢いを感じたが、大きなミスを出した方が負けとなる争いのなか、E スコアをしっかり稼いだロシアに軍配があがった。日本はドーハ大会よりもライバル国と戦う準備はできていたと思われたが、結果は優勝したロシアとの差が 3.567 となり、前大会の一位中国との差の 2.890 よりも差がひらいた結果となった。

◆団体予選上位 3 か国の E スコア

	ゆか	あん馬	つり輪	跳馬	平行棒	鉄棒	合計
ロシア	24.799	23.899	25.033	27.599	25.099	25.099	151.528
中国	26.032	23.658	24.500	26.966	25.699	24.299	151.154
日本	25.432	25.216	23.982	27.098	25.133	24.365	151.226
日口比較	0.633	1.317	-1.051	-0.501	0.034	-0.734	-0.302
日中比較	-0.600	1.558	-0.518	0.132	-0.566	0.066	0.072

◆団体決勝上位 3 か国の E スコア

	ゆか	あん馬	つり輪	跳馬	平行棒	鉄棒	合計
ロシア	25.133	23.632	25.632	28.032	25.399	25.698	153.526
中国	25.233	25.483	25.466	27.199	25.541	23.807	152.729
日本	24.465	24.699	25.132	27.474	24.332	23.957	150.059
日口比較	-0.668	1.067	-0.500	-0.558	-1.067	-1.741	-3.467
日中比較	-0.768	-0.784	-0.334	0.275	-1.209	0.150	-2.670

ゆかの採点では、審判会議において多くの時間が割かれたひねりの完了に関してきっちりと採点がされていた。また、タンブリングでの着地準備、着地時での姿勢の高さは格差がついていたように感じられた。一方、宙返り系での空中姿勢における膝われの過失に対しては、しっかりと減点がされているようには感じなかった。ただし、ひねり系の技における脚の重なりは相応の減点がされていた。タンブリング以外での捌きでは、着地後の安易な場所とりとなるコーナーへの移動は一步につき、0.1 ずつ減点するように会議で伝えられた。

あん馬では橋本大輝選手が高い評価を受け、ポディウムトレーニングでの実施では 9 点台をつける審判もいた。逆に谷川翔選手の開脚シバド移動は一旋回ごとに 0.30、あるいはそれ以上の減点を伴い、横向き（C 難度）でとる可能性がある指摘を受けた。競技全体を通してあん馬における縦向きの角度逸脱は、明確に減点される傾向が今回も継続して示されていた。とりわけ開脚シバド移動は、先行する手が旋回の抜き側と同じ場合、向きの逸脱を確認しやすい捌きになりやすく、注意が必要であった。谷川翔選手は予選、および団体決勝ではより意識をした捌きで実施し、E 難度と判定された。前年のドーハ大会で厳しく評価することが伝えられたセアから倒立に収める技での力を使用した捌きの判定は、やや緩和された印象であった。

つり輪では、全体のほとんどの演技が 8 点前半から 7 点後半に集中していた（全 E スコア平均 8.005）。8 点台中盤からそれ以上の E スコアを獲得した演技実施は、力静止技への持ち込み方、

静止時での姿勢、角度、静止位置などはもちろんのこと、僅かな揺れもない安定性、静止時からその後へつなぐ捌きまでも余裕のある表現が秀でていていると感じられた。

跳馬では第 2 空中局面での大きさはもちろんのこと、それ以上に着地時での姿勢の高さ、向き、準備動作の良し悪しが得点の差となっていることが感じられた。

平行棒では、ポディウムトレーニングでの ZOU Jingyuan 選手 (CHN) の演技に対して、E スコア 9.8 と述べる審判がいる一方、複数の静止技での時間が僅かに短いので 8 点台という審判もいた。倒立への収め、その後微調整を一切しない倒立姿勢が保たれているか、日本が好む柔らかい滑らかな捌きよりも機械的なカチッと収めて止める捌きの方が減点されない傾向にあった。終末技では、前方かかえ込み 2 回宙返り下り (E) や前方かかえ込み 2 回宙返りひねり下り (F) を実施する選手が多くみられたが、ロシア選手、中国選手、種目別決勝進出者で実施した捌きをまとめると、宙返りの高さ、着地準備での余裕のある局面、着地時での姿勢が日本選手より優れていることが非常に印象的であった。

鉄棒では、減点がされやすいひねり系の技を取り入れる演技が少なくなったものの、後方車輪ひねり倒立や前方車輪ひねり倒立、エンドーひねり倒立などでも厳しくチェックされる傾向であった。手放し技では再びキャッチする際に 1/2 ひねりをして難度を一段階あげる技を取り入れる実施が多くみられたが、D スコアを 0.1 上げる代償として、ひねり不足、姿勢、歪みなどでそれ以上の減点をされる実施が多かった。

個人総合では、NAGORNY Nikita 選手 (RUS) が 88.772 の驚異的な得点で優勝を飾り、2 位には DALALOYAN Artur 選手 (RUS) が続き、ソ連時代を彷彿とさせる強さを印象付けた。3 位には、リオデジャネイロ五輪で 2 位となった VERNIAIEV Oleg 選手 (UKR) がケガからの復活を遂げ銅メダルに輝いた。

D スコアのトータルでは前ルールから引き続き VERNIAIEV 選手が高いスコアを維持しており、本大会では 36.7 と出場選手中最も高い数値であった。次いで優勝した NAGORNY 選手が予選で 36.5 であり一年前から 0.4 の上昇、DALALOYAN 選手は 35.3 から 0.7 の上積みが見られていた。他、中国選手では DENG Shudi 選手 (CHN) が予選で 36.1、XIAO Ruoteng 選手

(CHN) は 36.0 であった。日本選手では萱和磨選手の 35.8 が最高であった。個人総合でメダルを争うには 36 点以上が必要条件となっていると言えるだろう。

◆個人総合決勝上位 8 名 D スコア

			FX	PH	SR	VT	PB	HB	Total	個人総合
1	VERNIAIEV O	UKR	6.1	6.6	6.0	5.6	6.7	5.7	36.7	3
2	NAGORNY N	RUS	6.4	6.2	6.0	5.6	6.4	5.8	36.4	1
3	DALALOYAN A	RUS	6.5	5.8	6.0	5.6	6.4	5.7	36.0	2
4	XIAO Ruoteng	CHN	6.2	6.3	5.7	5.6	6.2	6.0	36.0	4
5	萱 和磨	日本	5.8	6.4	6.1	5.2	6.3	6.0	35.8	6
6	SUN Wei	CHN	5.5	6.3	5.8	5.6	6.2	6.0	35.4	5
7	FRASER Joe	GBR	5.8	5.9	5.8	5.2	6.6	5.9	35.2	8
8	MIKULAK S	USA	5.9	5.5	5.6	5.2	6.4	6.1	34.7	7

E スコアでは、NAGORNY 選手が 52.372 の高い得点を獲得していた。DALALOYAN 選手とともに、ロシア選手の質の高い演技が評価されていた。他の出場選手と比較すると、技の遂行中での姿勢欠点の少なさ、安定した着地、空中局面やスイング等でも姿勢が乱れない捌きは徹底した基本の重要性を改めて感じた。さらには、演技の開始や着地後の立ち姿勢、ゆかでの体操的な動きや所作にも意識が注がれており、技の遂行のみに志向が向きやすい試合での演技において、本来の体操競技の追求すべき方向性を意識させられた。

◆個人総合決勝上位 8 名 E スコア

			FX	PH	SR	VT	PB	HB	Total	個人総合
1	NAGORNY N	RUS	8.641	8.366	8.633	9.466	8.900	8.366	52.372	1
2	DALALOYAN A	RUS	8.700	8.200	8.433	8.566	8.833	8.533	51.265	2
3	SUN Wei	CHN	8.533	8.691	8.166	9.100	8.733	8.000	51.223	5
4	MIKULAK S	USA	8.500	7.500	8.400	9.066	8.925	8.600	50.991	7
5	XIAO Ruoteng	CHN	8.825	8.700	8.233	9.200	9.066	6.666	50.690	4
6	VERNIAIEV O	UKR	8.166	8.266	8.000	9.200	8.775	7.966	50.373	3
7	萱 和磨	日本	8.500	8.166	8.200	8.900	8.700	7.733	50.199	6
8	FRASER Joe	GBR	8.366	7.900	8.166	9.066	8.300	8.100	49.898	8

その他の国々では種目に特化した選手の活躍が印象に残った。

ゆかでフィリピンの YULO Carlos Edriel 選手、あん馬で MCCLENAGHAN Rhys 選手 (IRL)、LEE Chih Kai 選手 (TPE)、鉄棒では種目別決勝で失敗したものの TANG Chia-Hung 選手 (TPE) など、その種目特有の求められる理想の演技を追求した実施であった。

一方、今年のメダリストであった選手がメダルに届かないばかりか、予選落ちするケースもあり、0.001 を争う中でのほんの些細な差が命運を分ける厳しさを垣間見ることができた。とりわけ平行棒で金メダルが確実視されていた ZOU Jingyuan 選手の予選落ち、跳馬で連続金メダル獲得中の RI Se Gwang 選手 (PRK)、大きな波乱が起きにくいつり輪でメダリストの PETROUNIAS Eleftherios 選手 (GRE) や ZANETTI Arthur 選手 (BRA) がメダルに届かなかった。

◆国別メダル獲得数

	1 位	2 位	3 位	計
RUS	3	2	1	6
GBR	2			2
TUR	1	1		2
CHN		1	1	2
日本			2	2
UKR			2	2
BRA	1			1
PHI	1			1
CRO		1		1
ISR		1		1
ITA		1		1
TPE		1		1
FRA			1	1
IRL			1	1

◆種目別メダル獲得国

	1 位	2 位	3 位
団体	RUS	CHN	日本
個人総合	RUS	RUS	UKR
ゆか	PHI	ISR	CHN
あん馬	GBR	TPE	IRL
つり輪	TUR	ITA	FRA
跳馬	RUS	RUS	UKR
平行棒	GBR	TUR	日本
鉄棒	BRA	CRO	RUS

今大会ではロシア、中国が引き続き強さを示したなか、東京 2020 への出場をかけた個人の争いが熾烈を極め、また種目別に特化した若手選手の活躍も目につき、今まで得意種目で台頭していた選手が決して安泰ではないことも伺えた。メダル獲得の国・地域は前々回 (11)、前回 (13) よりも分散されており、全ての競技において安穩なものはなく、日本にとっては、東京 2020 に向けて最後まであきらめず 0.001 を高める手立てを尽くしてほしい。

最後に今大会から導入された採点上の新システムの状況について報告しておきたい。富士通による採点支援システムがインクワイアリで映像資料として活用され、つり輪の輪の高さで前方宙返り直接十字懸垂 (ホンマ十字懸垂) で不認定が認定に覆る判定が 1 件生じた。今後の導入の流れを踏

まえると、積極的に新システムの理解を深めることは東京 2020 のみならず、その先を見据えた場合、重要な案件であると言える。関係各部署が情報共有し、効果的な対処策が講じられるよう最善を尽くしていただきたい。

13. 種目別上位者の演技構成

◆ ゆ か

1.YULO Carlos Edriel (PHI) 15.300 D6.50 E8.800

後方伸身宙返り 2 回宙返り 1 回ひねり (E)、前方屈身 2 回宙返りひねり (F)、後方伸身宙返り 5/2 ひねり～前方伸身宙返り 5/2 ひねり (D+E)、後方伸身宙返り 7/2 ひねり～前方伸身宙返りひねり (E+B)、後方伸身宙返り 2 回ひねり (C)、開脚座から力十字倒立 (C)、前方伸身宙返り 1 回ひねり～前方伸身宙返り 2 回ひねり (C+D)、後方伸身宙返り 3 回ひねり (D)

2.DOLOGOPYAT Artem (ISR) 15.200 D6.40 E8.800

ザパタ (G)、前方伸身宙返り 1 回ひねり～前方伸身宙返り 5/2 ひねり (C+E)、後方かかえ込み 2 回宙返り 2 回ひねり (E)、後方伸身宙返り 5/2 ひねり～前方伸身宙返り 2 回ひねり (D+D)、後方伸身宙返り 3/2 ひねり～前方伸身宙返り 3/2 ひねり (C+C)、フェドルチェンコ (C)、後ろとびひねり前方かかえ込み 2 回宙返りひねり (D)

3.XIAO Ruoteng (CHN) 14.933 D6.20 E8.733

前方伸身宙返り 5/2 ひねり (E)、後方伸身宙返り 7/2 ひねり～前方伸身宙返りひねり (E+B)、後方かかえ込み 2 回宙返り 2 回ひねり (E)、後方伸身宙返り 5/2 ひねり～前方伸身宙返り 2 回ひねり (D+D)、開脚旋回 270° 以上ひねり直接倒立、下して開脚旋回 (D)、ゴゴラーゼ (C)、後方伸身宙返り 2 回ひねり (C)、後方伸身宙返り 3 回ひねり (D)

◆ あん馬

1.WHITLOCK Max (GBR) 15.500 D7.00 E8.500

逆交差倒立 (D)、G コンバイン (G)、E フロップ (E)、ブスナリ (F)、開脚旋回縦向き 3/3 前移動 (E)、開脚旋回縦向き 3/3 後ろ移動 1 回ひねり (2 回以内の旋回で) (E)、ロス (D)、ウ・グォニアン (E)、馬端馬背ロシアン 1080° 転向 (D)、DSA 倒立 450° ひねり 3/3 移動下り (E)

2.LEE Chih Kai (TPE) 15.433 D6.50 E8.933

逆交差倒立 (D)、下向き逆移動倒立 3/3 移動下ろして旋回 (E)、ピネーロ (D)、ケイハ 1 (F)、アイヒホルン (E)、横向き旋回 1 回ひねり (D)、1 回の旋回で正面横移動 (C)、開脚旋回縦向き 3/3 前移動 (E)、開脚旋回縦向き 3/3 後ろ移動 (E)、下向き逆移動倒立 3/3 移動下り (D)

3.McCLENAGHAN Rhys (IRL) 15.400 D6.40 E9.000

逆交差倒立 (D)、G コンバイン (G)、E フロップ (E)、あん部馬背ロシアン 1080° 転向 (E)、一把手上縦向き旋回 (B)、マジヤール移動 (D)、シバド移動 (D)、ウ・グォニアン (E)、馬端馬背ロシアン 1080° 転向 (D)、DSA 倒立 3/3 移動下り (D)

◆ つり輪

1.COLAK Ibrahim (TUR) 14.933 D6.20 E8.733

後方伸腕伸身逆上がり水平支持 (E)、後方伸腕伸身逆上がり中水平支持 (F)、後ろ振り上がり上水平支持 (D)、ヤマワキ (C)、ジョナサン (D)、後ろ振り上がり中水平支持 (E)、ナカヤマ (D)、輪の高さで前方宙返り直接十字懸垂 (D)、後ろ振り上がり倒立 (C)、前方屈身 2 回宙返り下り (D)

2.LODADIO Marco (ITA) 14.900 D6.30 E8.600

バランディン 3 (E)、後方伸腕伸身逆上がり中水平支持 (F)、後ろ振り上がり中水平支持 (E)、ヤマワキ (C)、ジョナサン (D)、ホンマ十字懸垂 (D)、後ろ振り上がり上水平支持 (D)、アザリアン (D)、後ろ振り上がり倒立 (C)、後方かかえ込み 2 回宙返り 2 回ひねり下り (E)

3.AITSAID Samir (FRA) 14.800 D6.20 E8.600

ザネッティ (F)、後方伸腕伸身逆上がり中水平支持 (F)、ほん転逆上がり倒立 (C)、ジョナサン (D)、ヤマワキ (C)、後ろ振り上がり中水平支持 (E)、後ろ振り上がり上水平支持 (D)、ナカヤマ (D)、後ろ振り上がり倒立 (C)、後方伸身 2 回宙返り 1 回ひねり下り (D)

◆ 跳馬

1.NAGORNYI Nikita (RUS) 14.966

1 本目：ドラグレスク 14.933 D5.60 E9.333
2 本目：ル・ユーフ 15.000 D5.60 E9.400

2.DALALOYAN Artur (RUS) 14.933

1 本目：シライノキム・ヒフン 14.933 D5.60 E9.333
2 本目：ブラニク 14.933 D5.60 E9.333

3.RADIVILOV Igor (UKR) 14.794

1 本目：ドラグレスク 14.833 D5.60 E9.233
2 本目：ル・ユーフ 14.666 D5.60 E9.066

◆ 平行棒

1.FRASER Joe (GBR) 15.000 D6.60 E8.400

後ろ振り上がり前方屈身宙返り支持 (D)、棒下宙返りひねり倒立 (E)、棒下宙返り倒立 (D)、ピアスキー (D) ~単棒倒立からヒーリー (E)、タナカ (F)、タジェタ (E)、ヒーリー (D)、前振りひねり倒立 (C)、前方かかえ込み 2 回宙返りひねり下り (F)

2.ONDER Ahmet (TUR) 14.983 D6.20 E8.783

後ろ振り上がり前方屈身宙返り支持 (D)、シャルロ (E) ~単棒倒立からヒーリー (E)、棒下宙返りひねり倒立 (E)、後方車輪倒立 (C)、前方開脚 5/4 宙返り支持 (E)、伸腕屈身力倒立 (B)、ヒーリー (D)、前振りひねり倒立 (C)、前方かかえ込み 2 回宙返りひねり下り (F)

3.KAYA Kazuma (JPN) 14.966 D6.30 E8.666

後ろ振り上がり前方屈身宙返り支持 (D)、ヒーリー (D)、棒下宙返りひねり倒立 (E)、棒下宙返り倒立 (D)、前方開脚 5/4 宙返り腕支持 (D)、バブサー (E)、ティッペルト (D)、ピーターズ (D)、単棒横向き閉脚浮腰上がり倒立 (C)、前方かかえ込み 2 回宙返りひねり下り (F)

◆ 鉄棒

1.MARIANO Arthur (BRA) 14.900 D6.30 E8.600

エンドー1回ひねり大逆手 (D)、アドラーひねり (D)、後方とび車輪 1 回ひねり (C)、伸身トカチェフ~トカチェフ~リンチ (D+C+D)、ヴィンクラー (F)、アドラー1回ひねり片逆手 (D)、ヤマワキ (D)、後方伸身 2 回宙返り 2 回ひねり下り (E)

2.SRBIC Tin (CRO) 14.666 D6.20 E8.466

前方車輪 1 回ひねり大逆手 (C)、ピアッティ~トカチェフ~伸身トカチェフ~リンチ (D+C+D+D)、アドラーひねり (D)、モズニク (E)、アドラー1回ひねり逆手 (E)、シュタルダー (B)、後方伸身 2 回宙返り 1 回ひねり下り (D)

3.DALALOYAN Artur (RUS) 14.533 D6.1 E8.433

カッシーナ (G)、伸身コバチ (E)、モズニク (E)、アドラーひねり (D)、伸身トカチェフ (D)、アドラー (C)、大逆手車輪 (B)、ヤマワキ (D)、シュタルダー (B)、後方伸身 2 回宙返り 2 回ひねり下り (E)

3. 2019 年国内競技会総括および指標

□ ゆか

D スコアの分布では、昨年度と比較して 6.0 以上の演技が増えてきた。逆に着地が多い種目のため E スコアは高くなりにくい傾向であった。着地の一步がより厳しく評価されるようになったり、ひねり不足や姿勢の乱れなどの他の減点項目についても厳密に採点された結果、E スコアの分布は 8 点前後に集中していた。高い評価を受けた実施は、宙返り技において美しさと雄大さを伴い、着地の準備が意識され、しっかりと止めた演技であり、8.5 以上の高い E スコアを獲得していた。

宙返りの連続では、ひねり不足による斜め向きの体勢から次の宙返りへつなぐ実施は、減点の対象となるので注意してほしい。また、屈身や伸身などの姿勢によって難度の異なる技は、意図的に技を行う必要がある。腰や膝のまがりによって姿勢が不明瞭な実施では、意図する技と異なる判定となる可能性がある上、曖昧な姿勢としての減点となる。

今後の方針としては、引き続き着地が止まる演技を評価するが、単に着地が止まるだけではなく、腰高で上半身が起き上がり安定した実施を期待する。さらに D スコアを高めつつ、実施においてもひねり不足や脚の開き、つま先の乱れなどの減点のない捌き、かつ雄大性、美しさ、安定感が感じられる演技を期待したい。

□ あん馬

2019 年シュトゥットガルト世界選手権では、腰の位置の高い旋回や丁寧な技捌き、体線の美しさやスピード感のある演技に対して高い評価となった。E スコアを高めるためには、改めてスピード感のある実施や腰の位置が高い旋回、各々の技の後処理までしっかりと目を向けて準備していく必要があると感じる。

例えば国内では、トンフェイやロス、ウ・グォニアンなどの後にすぐ旋回に持ち込む構成が多いが、腰の位置が低く旋回自体がつまった実施となる傾向が散見された。E スコアを確保するためにも、それぞれの移動後に 180 度転向等を加えて捌くことも対処の一つとして検討していく必要があると感じる。

交差倒立の実施については、昨年のドーハ世界選手権と比べて、認定の許容範囲に関して若干緩和されていたようである。国内では引き続き力による捌きではなく、しっかりとスイングを使用した実施を評価の対象とする。開脚旋回での技を実施する選手が多くなってきたが、縦向き移動技での向きの逸脱による減点が多いのも現状である。手の位置がまっすぐだとしても身体が横を向いているような実施では減点の対象となるのでしっかりと身体前面の向きを意識する必要がある。落下や大欠点を伴わずに通すことを重視した結果、小・中欠点が目立つ実施が多いのは残念に感じるが、年間のスパンで見通せば春先の演技に比べ、秋口では非常に丁寧な技捌きやスピード感のある実施が多く見受けられるようになってきた。

□ つり輪

後方伸腕伸身逆上がり中水平支持やアザリアンの実施については、春先から競技会を重ねるごとに持ち込みにおける捌きや、その静止姿勢についても丁寧に表現をしようとする実施が多くなってきた。また D スコアについても昨年度に比べて 6.0 を超える選手の数も増加し、D・E スコア共に強化が進んでいることは大変望ましい傾向だと捉える。しかしながら力静止技の姿勢に関しては、上位選手だけでなく日本全体的として改善する余地は未だ残されている。日頃のトレーニングにおいて、「僅かに高い」や「少し傾いている」などを見過ごすことなく、より正確で力強い実施を目指した取り組みを期待する。

静止時間については、身体の全ての部分が明確に静止する捌きが求められ、姿勢や静止位置の修正・調整などを行わずに、一連の動作で最終的な静止位置に持ち込むことが望まれる。キメが遅く不明確なため、静止時間不足の減点を受ける実施が見受けられた。主だった技の実施における注意点として、中水平支持の肩の高さおよび姿勢（反り）、ナカヤマやアザリアンの反動を使った捌き、

水平支持の上体の角度逸脱および腰まがり、ホンマ十字懸垂での持ち込む際の肩の高さ、け上がり
の肘まがりなどが挙げられ、各々の技に対してより妥協のない継続的なトレーニングが望まれる。

□ 跳馬

側転とびにおける第1局面の脚の開きがまだ上位層の選手にも見られるが、これは単なる実施欠点のみならず、技術欠点としての減点が課されることとなる。また、倒立位を垂直に通過しない脚の振り上げは、第2局面での跳馬の中心からの歪みに直結するので、これも減点が重複して加算されることとなる。

第2局面の雄大さは、演技の評価の大部分を決めると言える。アカピアン～ドリッグス～ロペスト、実施する跳越技の価値点が上がるにつれて、跳越の大きさは当然増していく。雄大な跳越に価値があるとされている以上、高く、遠くに跳べた演技を評価することは不変である。

現行ルールでは価値点の高い跳越技であっても、正確な実施ができなければ評価されない、ということが明確になってきた。着地の大きな乱れは、実施減点に加えて、着地の準備不足という技術的な減点にも抵触する可能性があるため、姿勢の乱れの少ない、腰の位置が高い着地でまとめることを意識してほしい。

□ 平行棒

平行棒において倒立で完了する技は、正しい倒立姿勢で静止できる状態で終了しなければならないが、身体ブレや肘のまがり、角度逸脱等の欠点が多く選手に見られた。それらは棒下宙返り倒立系の技において多くみられ、相応の減点がなされた。これらの減点項目は国際大会においても厳密にチェックされるようになってきているため、早急な対処が必要であると考えられる。また、他にも、こちんまりとした前振り上がり、ティップルトの脚下がり、後ろ振り上がり前方屈身宙返り支持から続く、後ろ振り倒立での力の使用などの減点が目立った。終末技に関しては「前方かかえ込み2回宙返りひねり下り」を実施する選手が増え、昨年に比べて脚開きの減点が改善されてきたことは特筆すべき点である。しかしながら、着地の準備不足や低い着地姿勢の減点は未だ多くの選手に見られるため、完成度を高める必要性があると考えられる。

□ 鉄棒

今年度の傾向として、厳密に角度逸脱の減点がチェックされるC難度以上のひねって(片)大逆手になる技を回避し、代替えとしてエンドー、エンドーひねり、シュタルダー、シュタルダーひねりなどのB難度技を取り入れ、Dスコアを下げてもEスコアを高めようとする演技が多くなっているように感じた。

逆にDスコアを高めるために手放し技を多用する演技も多くなってきたようにも感じた。手放し技については、組合せ加点を得るためにトカチェフ系およびコバチ系での連続が出現してきたことや、高難度のブレッドシュナイダー、ミヤチなどに挑戦する選手が増えてきたことは喜ばしいことである。しかしながらこれらの実施においては習熟度の高低差が大きく、安定性の感じられる演技はまだまだ少なかった。また、手放し技の後の握りでの肘まがり、車輪での停滞、手ずらしなどの減点も散見された。

アドラーひねりなどのひねって倒立(経過)になる技においては、水平位までは難度が認定されるものの、角度逸脱の減点は中欠点または大欠点を伴う実施も多く見られた。

後方浮腰回転後ろ振り出し順手背面懸垂(C)～順手背面車輪(D)～順手背面懸垂前振り上がり後方浮腰回転倒立(C)の実施が多く見られたが、柔軟性の有無で捌きの格差が生じた。順手背面懸垂前振り上がり後方浮腰回転倒立の実施では、必ずと言っていいほど角度逸脱の減点を伴うため、それを避けるために終末局面で足を抜いたのち、即座にシュタルダーに持ち込む捌きが増えてきた。

終末技は後方伸身2回宙返り1回、または2回ひねり下りが大半であった。後方伸身2回宙返り1回ひねり下りでは経過中に腰まがりが目立つ実施が多かったので注意してほしい。

4. 2017 年版採点規則修正、追加情報

1. 2017 年版採点規則正誤表

日本語版 2017 年版採点規則の誤植・追加等による訂正

ページ	訂正箇所	誤		正
p121	IV-36	後方かかえ込み 3 回宙返り下り	⇒	難度表記 <u>G</u> を追加
p161	I -95	前方開脚宙返り支持経過懸垂	⇒	前方宙返り開脚抜き支持経過懸垂
p161	I -100	前方開脚宙返り抜き腕支持	⇒	前方宙返り開脚抜き腕支持
p161	I -101	前方開脚宙返り抜き屈腕支持	⇒	前方宙返り開脚抜き屈腕支持
p167	II-53	後ろ振り上がり前方開脚宙返り腕支持	⇒	後ろ振り上がり前方宙返り開脚抜き腕支持
p177	タジェダ	技番号訂正 III-124	⇒	III- <u>125</u>

2. 2018 年 1 月公表の FIG Code of Points 2018.1 月版での変更箇所

※赤字は追加・修正されたもの

※黄色塗りつぶしは、本 28 号であらたに修正・追加された箇所

(1) 一般条項

該当箇所	変更種	内容												
P9 減点表	項目削除	演技中、コーチが選手に話しかける ※P11、コーチの行為にて対応												
P9 減点表	項目追加	公式ウォームアップ時間を守らない：決定点から毎回 0.30 減点 (審判長によって)												
P10 減点表	項目追加	公式ウォームアップ時間を守らない：チーム得点から毎回 1.00 減点 (審判長によって)												
P21 7-4条 5.d)	文言追加	各種目において、難度表に記載されていない開脚の力技または静止技を実施した場合。												
P28 9-2条 13.	文言追加	つり輪において、振動または引き上げから静止姿勢に移る間、肩は最終的な静止姿勢より上げてから持ち込んでではない。												
P28 9-2条 17.	表の移動	着地に関する減点表は 16.の後に移動する												
P28 9-2条 17.	項目追加 (文章変更)	着地に関して「小さくとぶ」とは、最大でも足ひとつ分の幅・距離を指す。それよりも大きな一歩はどんな場合も、「大きく 1 歩」として中欠点の減点となる。												
P28 9-2条 17.	番号変更	17.に項目を追加した事により、17.の文が 18.にずれる。												
P26 9-2条 7	文章追加	<table border="1" style="margin-left: auto; margin-right: auto;"> <thead> <tr> <th>欠点</th> <th>角度</th> <th>減点</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>わずかにまがる</td> <td>> 0° - 45°</td> <td>0.1</td> </tr> <tr> <td>明らかにまがる</td> <td>> 45° - 90°</td> <td>0.3</td> </tr> <tr> <td>極端にまがる</td> <td>> 90°</td> <td>0.5</td> </tr> </tbody> </table> <p>唯一の例外:</p> <ul style="list-style-type: none"> 平行棒・モイまたは車輪系の技のスイング動作中に水平位以前に、およびバブサー系の技の後に脚をまげること 鉄棒・振動中の脚をまげること、および手放し技でバーをつかむ際の腕をまげること 	欠点	角度	減点	わずかにまがる	> 0° - 45°	0.1	明らかにまがる	> 45° - 90°	0.3	極端にまがる	> 90°	0.5
欠点	角度	減点												
わずかにまがる	> 0° - 45°	0.1												
明らかにまがる	> 45° - 90°	0.3												
極端にまがる	> 90°	0.5												

3-1 条	文章追加	つり輪と鉄棒を除き、選手の演技中にコーチがポディウムへ留まることは許されていない。平行棒において、跳躍板を移動させる必要がある場合のみ、コーチはポディウムに留まることを認められるが、行為の直後にポディウムから降りなければならない。
-------	------	---

(2) ゆか

①ゆか条文

該当箇所	変更種	内容
P34 10-2 条-1 c)	文章変更	(項目の文末に次の文を追加) 選手はフロアエリア全面を使用しなければならない。アクロバット技に際して同一対角線の使用回数には制限がない。しかし、各コーナーを使用しなければならない、不使用の場合演技につき一回、D 審判による 0.30 のニュートラルディダクションとなる。 最終タンブリングで未使用のコーナーへ向かえば、このコーナーは使用したものとすることができる。
P35 10-2 条-2 5. 組合せについて (CV) .	文章追加	(項目の文末に次の文を追加) 加点のために 2 つ (以上) の技を組合せる際、不安定な着地で大過失の減点があった場合、または直接とび正面支持臥になった場合は、組合せ加点は与えられない。
P37 10-3 条 E 審判の表	文言削除	減点表中の「転倒=1.00」の文言を削除
P37 10-3 条 D 審判の表	項目削除	終末技が跳躍技ではない、または認められていない技 (転など) で終わる
9-3 条 E 審判の減点項目	文章追加	部分的にかかえ込み姿勢で実施した場合にも難度が格下げにならない、いくつかの跳躍技に関する明確化： 例) 前方伸身宙返り 2 回ひねりにおいて、2 回目のひねりで膝のまがりが見られても「あいまいな姿勢(かかえ込み、屈身、伸身)」としての減点を伴って、2 回ひねりの価値を得ることができる。

②ゆか難度表

該当箇所	変更種	内容
I-44・45	文の追加	(難度表内に以下の文を追加) 「これらの技は倒立から行わないでも認定する事ができる」
II-48	技の追加	前方伸身宙返り 7/2 ひねり (ゴシマ) : G 難度
II-60	技の追加	前方かかえ込み 2 回宙返り 3/2 ひねり (ザパタ) : G 難度
III-7・8	文の追加	「後ろとびひねりからのものも含む」
技番号未定	技の追加	前転から手を広げた開脚浮腰支持経過十字倒立 (リーク) : C 難度 (I)
III-23	技名追加	ゴンザレス

(3) あん馬

①あん馬条文

該当箇所	変更種	内容								
P62 11-2条-2 2. 補足説明 a) 一般 a 5.)	項目追加	※新しい項目 「1回の旋回で正面横移動（馬端馬背から両把手を越えて逆馬端馬背）」で、D難度を得るためには、把手を使用してはならない。								
	項目番号 変更	a 5.) より項目番号がずれる a 6.) → a 7.) a 7.) → a 8.) a 8.) → a 9.) a 9.) → a 10.)								
P62 11-2条-2 2. 補足説明 a) 一般 新 a 6.)	文章追加	(項目の文末に次の文を追加) 落下に関する規定をより明確にするため、全てのグループⅡ・Ⅲの技は、倒立に上げて開脚での支持に下ろす技を除き、価値を得るためには難度表に掲載された技に続ける必要がある。落下した場合は部分的な価値も与えることはできない。次に続く技が開始された後に落下した場合は、前の技を認定することができる。								
P62 11-2条-2 2. 補足説明 a) 一般 旧 a 9.)	項目削除	以下、すべて削除。 トンフェイは開始/終了の体勢により、4つのタイプに分類される。その内3つのタイプは、終末局面で完全な旋回をもって技の完了とし、難度を認める。(横～縦、縦～横、縦～縦)								
P62 11-2条-2 2. 補足説明 a) 一般 新 a 9.)	文章追加	(項目の文末に次の文を追加) 「ウ・グォニアンの上に、難度表に記載のいかなる技でも続けることができる(ロシアン180°や360°等)」								
P62 11-2条-2 2. 補足説明	番号変更	・モギルニー(Ⅲ-70)は、さらに技を加えても難度の格上げは認めない。 ・ベレンキ(Ⅲ-76)は、さらに技を加えても難度の格上げは認めない。								
P65 11-2条-2 3. 特別な繰り返し a)	番号変更 追加	・ドリッグス(E:Ⅲ-41) ・縦向き前移動(3/3:馬端～把手～把手～馬端)(C:Ⅲ-45) ・マジヤール(D:Ⅲ-46) ・開脚旋回縦向き3/3前移動(E:Ⅲ-53) ・ピロゼルチェフ(C:Ⅲ-51) ・縦向き後ろ移動(3/3:馬端～把手～把手～馬端)(C:Ⅲ-57) ・シバド(D:Ⅲ-58) ・開脚旋回縦向き3/3後ろ移動(E:Ⅲ-65) ・縦向きとび後ろ移動(馬端～馬端)(E:Ⅲ-59)								
P66 11-2条-2 3. 特別な繰り返し b)	番号変更	ロシアン転向技は、終末技を含めて演技中2回まで認めるものとする。ロシアン転向を含む一把手上で行うコンバインや、移動を伴うクロル、ウ・グォニアン、ロス、トンフェイ等に関してはこの規定を適用しない。(Ⅲ-87、88、89、81、82、94、95)								
P67 11-3条 E 審判	文章追加	<table border="1"> <thead> <tr> <th>振幅</th> <th>減点</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>肩の高さより上</td> <td>0.0</td> </tr> <tr> <td>肩と水平位の間</td> <td>0.1</td> </tr> <tr> <td>水平位よりも下</td> <td>0.3</td> </tr> </tbody> </table>	振幅	減点	肩の高さより上	0.0	肩と水平位の間	0.1	水平位よりも下	0.3
振幅	減点									
肩の高さより上	0.0									
肩と水平位の間	0.1									
水平位よりも下	0.3									

②あん馬難度表

該当箇所	変更種	内容 (移動先)
II-27	技の追加	両把手を挟んで横向き(開脚)旋回ひねり (ケイハ 2) : C 難度
II-30	技の追加	両把手を挟んで横向き(開脚)旋回 1 回ひねり (ケイハ) : F 難度
II-69	技名の追加	ベルトンチェリ
III-47	技番号移動	III-53
III-59	技番号移動	III-65
III-59	技の追加	縦向きとび後ろ移動 (馬端～馬端) (カルバノフ) : E 難度
III-63	技番号移動	III-69
III-64	技番号移動	III-70
III-70	技番号移動	III-76
III-75	技番号移動	III-81
III-76	技番号移動	III-82
III-81	技番号移動	III-87
III-82	技番号移動	III-88
III-83	技番号移動	III-89
III-88	技番号移動	III-94
III-89	技番号移動	III-95
II-52	技番号確定	両把手を挟んでシュテクリ A (DSA) (ケイハ 3) : D 難度
技番号未定	技の追加	両把手を挟んで外向き旋回ひねり (ケイハ 4) : E 難度 (III)
II-30	技の追加	両把手を挟んで外向き旋回一回ひねり (2 回以内の旋回で) (ケイハ 5) F 難度
II-52	技の追加	馬端中向き縦向き支持から両把手を挟んで上向き転向 (ケイハ 6) : D 難度 (ケイハ 3 と同枠)
IV-16	技名の追加	イエッセン
IV-22	技の追加	馬端から反対の馬端へロシアン 180° 転向移動倒立下り (ペルラン) : D 難度
III-93	技の追加	馬端外向き支持から遠い方の把手へ下向き逆移動、一把手上縦向き外向き支持 (ロメロ) : C 難度
III-94	技名の追加	アブ アル サウド

(4) つり輪

①つり輪条文

該当箇所	変更種	内容
P91 1 2・2 条・2 2.	文章追加	グループ II や III を連続して 4 回続けることはできず、D 審判によって難度は認定されない。3 連続の後にグループ I の B 難度以上の技が入れば改めて 3 連続が可能である (ただし、け上がり・後方け上がり系、およびその同一枠の技を除く)。この B 難度以上の振動技はカウントされる 10 技内であつ同一グループ内で上位 5 技以内に含まれていなければならない。行われたグループ II・III の技は全て、カウントされる 10 技内であってもなくても、また技術欠点により不認定になったとしても、この項目に抵触するものとする。

P91 1 2-2 条-2 3. 特別な繰り返し c)	項目追加	基本的な支持姿勢である脚前拳支持と脚上拳支持は、違った力技だと考えられるため、この特別な繰り返しの項目には当てはまらないものとする。よって前振り上がり脚前拳支持と前振り上がり脚上拳支持を両方実施することができる。しかし「終末姿勢が同一の力静止技は各グループで1技だけ」とする制約により、例えばげ上がり脚前拳支持と前振り上がり脚前拳支持を実施することはできない。
P92 1 2-2 条-2 4. 補足説明 f)	文言削除	「停滞」を削除 ヤマワキやジョナサンで完全な支持や停滞がみられた場合
P92 1 2-2 条-2 4. 補足説明 g)	項目追加	「輪の高さで前方宙返り直接十字懸垂」で持ち込む際に 45°以上の角度の逸脱は難度を認定しない。また意図した技とは異なるため、部分的な難度も与えられない。 (以降、項目番号がずれる)
	項目番号 変更	g) より項目番号がずれる g) → 新h) h) → 新i) i) → 新j) j) → 新k) k) → 新l) l) → 新m) m) → 新n)
P92 1 2-2 条-2 4. 補足説明 新n)	文言追加	演技には1つの振動倒立技(2秒)が必要であり、カウントする10技に入っていないなければならない(ジュニア: 8技)。
9-4 条 E 審判の減点項目	文章追加	II-27 支持(水平支持)から伸腕伸身力倒立(2秒): この技は、身体が鉛直面(地面に対して垂直)を通過してからは伸身姿勢を保持し続けなければならない。鉛直面を越えてから 45° を超えて身体をまげた場合、その技は II-26 伸腕屈身力倒立(2秒)として判定される。
9-4 条 E 審判の減点項目	文章追加	げ上がり系の技は、深く腰をまげた姿勢から開始され、明確に大きな振動を伴って実施される振動系の技である。III-59 後方げ上がり中水平支持(2秒)のようなげ上がり系の技で、最小限しか腰をまげない捌きや、振動よりも力を使った場合は、小・中・大欠点となる。

②つり輪難度表

該当箇所	変更種	内容(移動先)
II-23	技の追加	懸垂から伸腕で引き上げ脚上拳十字懸垂(2秒) (コラック) E 難度
II-113	技の追加	ゆっくりと前方伸腕伸身支持回転十字懸垂経過中水平支持 (2秒)(ファム2): E 難度
IV-42	技の追加	後方屈身3回宙返り下り(ウィッテンバーグ): H 難度
IV-39	技番号移動	IV-45
IV-40	技番号移動	IV-46
IV-41	技番号移動	IV-47
IV-42	技番号移動	IV-48
IV-45	技番号移動	IV-51
IV-46	技番号移動	IV-52
IV-48	技番号移動	IV-54
II-107	技番号変更	II-119
II-119	技番号変更	II-107
II-66	技の追加	懸垂からゆっくりと伸腕引き上げ十字懸垂経過上向き中水平 (2秒)(タロック2): F 難度

(5) 跳馬

該当箇所	変更種	内容
跳越番号 110	価値点変更	3.6
跳越番号 111	価値点変更	4.0
跳越番号 230	価値点変更	3.6
跳越番号 342	価値点変更	3.6
跳越番号 574	技名追加	「シライ 3」
跳越番号 386	技名追加	「ヤン・ウェイ」
跳越番号 277	技名追加	「ヨネクラ」
ニュートラルディダクション (ND)	追加	競技直前練習で 2 回を越えて跳越をする。 →1 本目の跳越から 0.30

(6) 平行棒

①平行棒条文

該当箇所	変更種	内容
P151 1 4-2 条-1 6.	文言訂正	演技実施の減点に関しては、第 9 章および 9-4 条と 1 4-3 条における減点表を参照のこと。
P152 1 4-2 条-2 3. 補足説明 g)	項目追加	バブサーの実施について、バーを握る際は水平位で肩角度を開き、伸身で実施すべきである。バーを握る際に、身体が水平位から 45°以上の逸脱、または 90°の肩角度があった場合は、技の価値が与えられず、大欠点の減点となる。
P152 1 4-2 条-2 4. 特別な繰り返し a)	技名訂正 文章追加	前方 5/4 宙返り開脚抜き腕支持と屈腕支持、または支持経過懸垂や直接懸垂になる技 補足としてⅢ-47、58、59、65 は一括してこの規則に該当する。
P152 1 4-2 条-2 4. 特別な繰り返し c)	番号追加	最大 2 回までの棒下宙返り (逆上がり) 倒立技 (Ⅲ-106、107、108、114、119、120、123、124、130、131、136)
P152 1 4-2 条-2 5.	文言訂正	技として認められない原則や D スコアに関する他の詳細項目は第 7 章および 9-4 条、1 4-3 条の減点表を参照のこと。
P153 平行棒特有の減点	追加	「公式ウォームアップ時間を守らない」の項目は「D 審判」の項目表として独立して巻頭に配置。
P153 平行棒特有の減点	項目追加	(「E 審判」の減点が続く) ・モイ、後方車輪、水平位よりも早く脚がまがる：小・中欠点 ・バブサー等、水平位でバーを握り懸垂になる技で、け上がりの際の膝がまがる：中欠点

②平行棒難度表

該当箇所	変更種	内容 (移動先)
I-9	技の追加	前振り開脚抜き直接懸垂 (バボス) : C 難度
II-3	技の追加	前振り上がり開脚抜き懸垂 (ムンテアン) : C 難度
III-42	技の追加	懸垂前振り片腕支持 3/4 ひねり単棒倒立経過、軸手を換えて 3/4 ひねり支持 (パウマン) : F 難度
III-123	技の追加	棒下宙返り、かかえ込み姿勢でひねり腕支持 (ギャニオン) : C 難度
III-124	技の追加	棒下宙返り、伸身姿勢でひねり腕支持 (ギャニオン 2) : D 難度
III-121	技番号移動	III-127
III-122	技番号移動	III-128
III-128	技番号移動	III-134

Ⅲ-66	技の追加	懸垂前振りひねり前方屈身 2 回宙返り腕支持 (エスパルサ) : G 難度
Ⅲ-65	技名変更	懸垂前振りひねり前方かかえこみ 2 回宙返り腕支持
Ⅲ-66	技の追加	け上がり開脚抜き懸垂 (オオクボ) : C 難度
Ⅳ-18	技の追加	前方屈身 2 回宙返りひねり下り (ダラロヤン) : G 難度
Ⅲ-126	技の追加	棒下宙返り後方屈身宙返り腕支持 (屈身タジェダ) (フアレス) : F 難度
I-105	技の追加	前方屈身宙返り懸垂 (フアレス 2) : C 難度 ※「棒端前方かかえ込み (屈身) 宙返り懸垂」と同枠

(7) 鉄棒

①鉄棒条文

該当箇所	変更種	内容
P188 15-3条 鉄棒特有の減点	削除	「D 審判 (ニュートラルディダクション)」の表
P188 15-3条 鉄棒特有の減点	項目追加	エンドーやシュタルダーとワイラーの開始時の倒立位からの逸脱 : 小・中・大欠点 (難度は認定)

②鉄棒難度表

該当箇所	変更種	内容 (移動先)
Ⅲ-86	技番号移動	順手背面懸垂前振り上がりひねり支持 (オノ) (I-74 へ)
Ⅱ-46	〃	Ⅱ-40
Ⅱ-47	〃	Ⅱ-5
Ⅱ-52	〃	Ⅱ-58
Ⅱ-54	〃	Ⅱ-60
Ⅱ-57	〃	Ⅱ-39
Ⅱ-59	〃	Ⅱ-71
Ⅱ-60	〃	Ⅱ-72
Ⅱ-63	〃	Ⅱ-45
Ⅱ-66	〃	Ⅱ-90
Ⅱ-66	技の追加	ゲイロード 1 回ひねり (コーディノフ) : G 難度
Ⅱ-69	技番号移動	Ⅱ-51
Ⅱ-72	〃	Ⅱ-54
Ⅱ-83	〃	Ⅱ-89
Ⅱ-89	〃	Ⅱ-83
Ⅱ-90	〃	Ⅱ-96
Ⅱ-96	〃	Ⅱ-102
Ⅲ-57	技の削除	シュタルダーとび大逆手持ち換え
Ⅱ-16	技の追加	屈身トカチェフひねり片大逆手後ろ振り上がり倒立 (サミログ) : D 難度 (リンチと同枠)

5. おわりに

審判委員会
体操競技男子審判本部
本部長 高橋 孝徳

第 32 回オリンピック東京大会まで、残すところあと 6 か月となりました。2013 年 9 月 7 日に開催地が東京に決定し、関係者一同が歓喜とともに責任や期待、不安や重圧を感じたことでしょう。あれから瞬く間に 7 年の歳月が経ち、この間、日本男子チームはさまざまな紆余曲折の経験を経してきました。ここ数年は主要選手たちのケガによる影響もある中、ロシア、中国の若手選手の台頭により、この 2 か国に後塵を拝することになりました。2019 年はこのような苦境の中でも世界選手権では萱和磨選手が平行棒で銅メダルを獲得し、高校生で出場した橋本大輝選手が、世界にアピールする演技を披露してくれました。また、6 月に開催された第 1 回ジュニア世界選手権において、個人総合で岡慎之助選手が初代チャンピオンに輝き、団体戦でも日本が優勝を飾り、金メダル 4 個を含む 7 つのメダルを獲得しました。7 月のユニバーシアードでは萱和磨選手が個人総合優勝、団体では 3 連覇となりました。

昨年のシュトゥットガルト大会では、ロシアが強さを見せつけましたが、その要因は体操競技の基礎・基本の構築だと改めて実感しました。

ロシア、中国、日本にはそれぞれの強みがあります。勝つためには己の資質を自覚したうえで、劣っているもの、不足していることは真摯に受け止め克服していかなければなりません。ロシアには強さと美しさ、中国には機械のような確実性があると語られると同様に、日本は器用さに秀でていることを世界から認められています。器用さは時に小手先で対処できてしまう恐れがありますが、いま大事なことは、残りの期間で正しい基礎・基本を元にした“美しい体操”を復活させることです。美しい体操を体現するには基本を崩さず技が捌けることはもちろんのこと、全ての動きの見せ方、さらには演技全体の表現や所作までも意識した巧く安定した演技をする能力が必要です。ルールは変われども、体操競技の本質、何をよいとするのかの根幹に変わりはありません。選手の皆さんは、日々の練習から創意工夫を凝らし、目標を見据えたトレーニングに励んでいただきたいと存じます。

東京 2020 の団体出場メンバーは 4 月の全日本選手権、5 月の NHK 杯を経て決定されます。選手・コーチの皆さんにとりましては、オリンピックに向けて、一日一日が貴重な時間になっていると推察いたします。

男子審判本部では、代表選手の選考にあたり、より一層、審判技術の向上を図り適正かつ正確な審判業務を公平・公正に遂行する所存です。

情報 28 号では国際体操連盟による 1 月に通達されたニュースレター #36 を盛り込み、今年の採点指針を作成し掲載いたしました。内容を熟知し、自己研鑽に役立てて頂きたいと存じます。「難度認定及び演技実施の確認事項と FIG 通達」は採点における重要な事項が記載されています。別刷としましたので現場や各競技会で活用して下さい。

『2021 年版採点規則』の発行ならびにその伝達研修会（1 種審判員義務研修会）は 2020 年度事業となり、1 種審判員の参加が義務付けられています。また、1 種審判員の資格を有していない日本代表選考競技会に帯同するコーチにも伝達研修会への参加が促されており、いち早く新しい情報の入手や現場への活用が推進されることを期待致します。採点規則の改定は、国際体操連盟の動向・通達をもって進められます。次期ルールの通達、並びに国際審判員講習会の日程につきましては、決まり次第、協会ホームページ等でご連絡いたします。

先人たちが“ローマで勝って東京で連覇”の合言葉の元、1964 年東京五輪で勝利を手にしました。現日本チームが衰微し苦杯を嘗めた経験を糧とし、再び日の出を向かえてくれることを信じております。

“リオで勝って東京で連覇”を叶えられるよう選手、コーチ、審判員、関係者全ての皆様の力で達成できますことを祈念し本情報のまとめといたします。